

過程と見るか、おそらく評価は分かれると思われる。しかし、彼においてそれら両側面は分離してはならず、表裏一体のものと捉えられることは注目されてよいのではないだろうか。

宗教伝統の倫理的意義をめぐる一考察

飯田 篤司

現代の倫理混乱の中、世俗化の中で遁滅しつつあった宗教伝統をはじめとする伝統的価値観や共同体の意義が改めて問われている。例えばエンゲルハートの「迷走」にも見ることができるとように、生命倫理問題においては、「自律」と「社会的合意」をめぐる相克は、一つの主要な問題系をなしている。倫理学説史的には、これは近代におけるリベラリズム・リバタリアニズムの台頭と、それへのアンチテーゼとしての共同体論の展開として描かれる。宗教は本来、「自己決定の原理」としても、「社会的合意への背景・地平」としても機能するものではあるが、混乱の中に「指針」を指し示しうる希望として、宗教伝統の現代的意義も語られている。ただし、共同体論については、共同体自体が多義的で歴史的にも変容しており、その「共同体」の輪郭の不明瞭であることのみならず、それが「暴力」へと転化する権力論的視座が欠如しているといった問題が付きまとう。さらには共同体論の構想においては、共同体の外部へグローバル化社会の中でのその意義は問われよう。宗教伝統の意義を論ずるに際しても、こうした問いは不可避であろう。

こうした問題意識を踏まえつつ、宗教伝統の意義を再評価す

る試みとして、ジャンニ・ヴァッティモの「宗教の／への回帰」論を挙げることができよう。いわゆるポストモダンニズムの系譜に属するヴァッティモが提唱する「弱い思考」は、解釈学の帰趨として描かれ、「すべては解釈にほかならない」という解釈一元論を透徹する。それはニーチェ、ハイデガーの形而上学批判を受けて、絶対的な起源や基礎づけを求め「強い」思考の暴力性を批判せんとする倫理的関心に貫かれたものである。ヴァッティモはその受肉概念やケノーシス概念の解釈から、キリスト教はその当初から「神が現前しない」という「隔たり」を内包しており、むしろキリスト教史を辿りつき得ぬ解釈の歩みとして、本質的な偶然性に浸食された不断の自己創造として見なされる。そして「神が身を下げるといふケノーシスが意味する「弱さ」の中に、自己の「弱い思考」との本質的な同一性を見てとり、その非暴力的な他者に対する愛の教説に今日的な意義を置いていく。こうしたキリスト教伝統の理解は倫理的関心に貫かれたものではあるが、そこではもはや宗教的伝統は絶対的な指針を指し示す基盤としてではなく、むしろ「科学／宗教」といった対立図式、引いては宗教の「真理」自体を溶解しつつ、他者への開放性を可能とする地平として宗教伝統に光を当てるものである。それゆえ単なる復古的な伝統回帰は、現実の被投性を忘却する反動主義として斥けられることともなる。

こうした本質的に流動的相における宗教伝統の理解には、当然その妥当性に疑義も寄せられよう。例えば実際、「弱い思考／強い思考」という区分さえも形而上学的な二元論へと転化し、「弱い思考」は「基準」として機能するのはとの批判がなさ

れている。また、それが「キリスト教伝統の意義」を低減し、キリスト教を哲学化し矮小化する「暴力」とも批判される。ただし、ヴァッティモ自身が強調するよう「一つの解釈にすぎない」とすれば、「キリスト教とはいかなる自画像を受け入れるのか」という問題提起と解することができよう。また、キリスト教的諸概念に依拠するその構想には、グローバル化社会における有効性も問われようが、そもそもヴァッティモの宗教理解が普遍化を志向するものではなく自身の「地平」を自覚した倫理的なものであるがゆえ、「意義」を検討することはむしろ他文化圏の側に投げかけられることとなる。ただし、R・ローティーが同様の前提を共有しつつも、地平としての伝統の意義よりも、むしろそれを踏まえた「未来への志向」を語るように、「なぜ伝統か？」の必然性は改めて問われることとはなる。

宗教の現実態と宗教の諸研究——思想研究と実証的研究——

小田 淑子

(一) 問題提起 宗教の現実態という問題意識は、宗教行事に参加しつつ公然と無宗教を自認する現代日本人の宗教状況に由来するが、宗教の現実態はどの宗教にも見られる。宗教の現実態は理念や教義を逸脱しつつしかも一定の規範性をもつ宗教的行為や諸観念であり、日本では主体的信仰とは程遠く、慣習として根強く存続する祭や年中行事である。それは聖典などに基づく宗教思想研究では無視されてきた研究対象である。宗教の現実態は、宗教離れという意味での世俗化が進んだ間にもずっと存在していた。一方では、世俗化論はイスラーム復興の

ように当時は存在しなかった宗教や社会の変化に応じて再考を迫られてきたが、他方では、当時の理論が看過した問題もあり、その一つが宗教の現実態ではないだろうか。

一部は世俗化論の再考と関連しつつ、宗教概念の見直しも盛んに行われている。宗教の現実態を宗教学的に解明することは、宗教概念の見直しを逆方向から行うことを意図している。日本の宗教の現実態には、仏教学、民俗学、宗教社会学でさえ単独では解明しきれない複合的な問題が含まれている。既存の宗教理論の批判から始めず、宗教の現実態という研究対象に従来の諸理論をむしろ積極的に適用し、できるかぎり統合する試みでもある。

(二) 宗教の現実態の諸相 伝統宗教が存続するかぎり、その現実態が存在する。タイやチベットでも仏教と民間信仰などが混在しているが、仏教が日本より明示的に意識されている。その点を考えると、日本では仏教以上に神道という基盤あるいは枠組みが強く、それが宗教儀礼を「慣習」であると意識し、慣習が一種の規範性を付与してきたように思われる。キリスト教やイスラームの現実態に、教義から逸脱した崇拜や祈願が含まれることもあるとしても、それらも含めてキリスト教やイスラームとして意識される。欧米で世俗化論が盛んになった折、教会礼拝に参加する信徒数の減少がその指標として使われ、宗教の現実態は神意識や罪意識などの「見えない宗教」に求められた。だが、欧米および世界各地のキリスト教社会で、教会の可視的存在と意味は持続している。イスラームでは五行の儀礼は教義との一致が顕著だが、シャリーアとウンマの理念